
羽化する心 (仮)

redrum

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

羽化する心（仮）

【Nコード】

N2838I

【作者名】

redrum

【あらすじ】

古代遺産の眠る遺跡、害獣の猛威。世界には色んな国々がある。そんな中で遺跡を発掘調査する冒険者を目指す学生達の物語。リレー小説から派生した作品ですが、独立して読んで頂けます。

プロローグ（前書き）

普段は黒い物書きなんですが、今回は普通にラブコメ（？）目指してました。プロット立てる間に、無理な事はとっとと諦めようと思っただのは秘密です。

リレー小説で素敵な世界観を創って下さった先生方、一緒に冒険して下さいました先生方、いつも遅筆な私を励まして下さる周りの方々に捧ぐ。

プロローグ

私の事を一番理解しているのはウインクルムで。
ウインクルムの事を一番理解しているのは私。

そう思っていた、あの日までは。

麦畑を渡る風は優しく幼子達の頬を撫でる。まだ収穫には遠い青々とした麦穂の海原は風を受け、反射する光の波をよせては返す。

「サリュ、どこ？ どこにいるの？」

「ウイン、ここだよ」

ぴよこんと跳ねた女の子の頭が、また麦穂の海に沈む。

一瞬だけ見えた彼女は蒼みがかった銀の髪、琥珀の瞳、白磁の肌だった。そして右目を縁取る黒揚羽蝶の鱗翅を象った刺青。

「どこなの？」

サリュと呼ばれた女の子と、とてもよく似た男の子が麦畑の海から顔を出し、また沈む。彼の左目を象るのは対となる黒蝶の片翅の刺青だった。

「ここだよ」

麦穂かきわけ、男の子の袖を掴む女の子。頬笑み合い、戯れにまた離れてはお互いを探す。

女の子の名はサリューナ・グルカ、男の子の名はウインクルム・グルカ。酷似した容姿を持つ彼らは同じ日に生まれた双子であった。良く飽きもせずになやや遊ぶものだと、畑の手入れをしていた両親は双子を見て笑う。

双子の両親もお互い良く似た容姿をしている。蒼銀の髪に、琥珀色の瞳、白磁の肌。父の右目を縁取るのは鳥の片翼の刺青、対とな

る翼が母の左目を縁取る。彼ら一家の姿は妖精のように美しく、不思議な色彩を帯びていた。

「父さん、母さん、お腹すいたー」

「私も！」

口ぐちに叫ぶ幼子達を見つめ、父カステイガーと母アルマは微笑んだ。

水妖国

豊富な水源と美しい自然に囲まれた、音楽・絵画等の芸術が盛んな国　グルカ族の村はそんな国の湖の畔にあった。

彼らの村は人口七十人にも満たない小さなもので、皆がグルカ性を名乗り、大家族のような集落を形成している。

武芸に秀で勇猛を誇る戦闘系民族である彼らは、穏やかな水妖国の中では少し異質な存在といえよう。

平和な国とはいえ、害獣の猛威は容赦無くその牙と爪で人民を蹂躪する。近隣の街、村を襲う害獣達の群れから人々を守る　彼らの刃はそのために、ひたすらそれだけのために振るわれた。

遠い昔、滅びた水妖と彼を愛した娘との間に生まれたとされる彼らは不思議な能力を持つ。

その血を引く何人かは必ず男女の二卵性双生児で生まれ、片方がその護り手、片方がその遣い手となるのだ。

遣い手は類稀なる戦闘能力を持ち、護り手は遣い手の武器と盾に変身する事でお互いを助け合う。

そしてその“印”は外観に蒼銀の髪、琥珀色の瞳、対となる刺青に似た痣を刻む。

沈んでいく夕陽に辺りの景色は朱に染められていく。

農具を担ぎ、歩む父母を拙い足取りで追う双子の兄妹。

「僕ね、父さんと母さんみたいに大きくなったらサリュと結婚するー」

「私もワインと結婚するー」

結びつきの深い護り手と遣い手は、お互いを終生の相手に選ぶ事が多い。

双子の両親もまた双子であり、助け合い共に戦う事で結びつきを深めてきた。

比翼連理 幼子達もそうなりたと思っていた これは遠い

日々の記憶。

？

麦畑で遊んでいた日々から数年が経ち　今はサリユーナもウインクルムも十四歳。

まだ幼いながらも、二人は自身の進むべき道を決めた。

ウインクルムは植物についての研究、サリユーナは世界にはびこる害獣と戦う術を身につけるべく、二人は揃って冒険者養成学校へと進学する。

とはいえ、サリユーナに限ってはウインクルムが行くから付いて来たというのが理由の大部分を占めていたのだが。

男子寮の二〇七号室　二人部屋の共同スペースのキッチンで、サリユーナは調理をしていた。

今はまだ新学期も始まっていない準備期間。サリユーナはウインクルムの部屋で、こうして空いた時間を過ごす事が多かった。

全寮制の冒険者養成学校。新入生たちは正式な入学前に入寮を許される。世界の北東に位置する地沃国ちよくこくの離れ小島にあり、周りは樹海と海。休暇があってもそうそう自分の国元には戻れるものではない。

この寮の間取りはミングル。キッチン、シャワールーム等は共同スペース、後は個室が二部屋付いている。

サリユーナにあてがわれた女子寮の部屋と同じ間取りだ。

もちろん男子寮なのでルームメイトは男性。サリユーナ達の一年先輩だと聞いている。実地訓練を兼ねた遺跡発掘チームに抜擢されたらしく、入室して一週間経つがサリユーナ達はまだ“彼”を見た事が無い。

あまり寮則等も厳しくない校風だが、男子寮に女子が入り浸っているのは良くない事　サリユーナもそう思わないではない。

とはいえやっぱり双子の片割れと過ごす方がサリユーナにとっては気が楽だった。

（ウインのルームメイトさんが戻ってくるまでは　いいよね。それにあまり自分の部屋に居たくないんだもん）

赤の他人相手では、同性とはいえ気後れもすれば気も使う。

（それだけでなくもあの女は……）

一瞬、自分のルームメイトの女性の姿が脳裏をかすめた。

それを振り払うようにサリユーナは頭を振る。

そして鼻歌混じりのハミングで美しい旋律を奏で始める。思い出したくない事を忘れるように。

腰まで届く長い蒼銀の髪は鼈甲色のバレッタで今は後ろにきつくり纏められている。丈が長いオリーブグリーンのくつろいだ作りの半袖ワンピースに、レモンイエローのエプロンも、彼女の均整がとれた肢体に似合っている。

そして陶器のように白い肌、蒼銀の長い睫毛に縁取られた琥珀色の瞳は、光の反射にその濃淡を変え煌めく。

つんと少し上を向いた鼻、あどけない薄桃色の唇、まだ幼さは残るもののサリユーナは美しい少女に成長していた。

彼女は小さな食卓の上に、手際良く調理したものを並べていく。

鮮やかな緑のデイル、ケイパーを散らしたスモークサーモンのサラダ　薄いスライスオニオン、鮮やかな黄や赤のパプリカの千切り、半月切りにしたミニトマト……白地にサーモンピンク、赤や黄、緑の食材が彩りよく盛られている。

干し葡萄、砂糖漬けの杏、ダークチェリー等を混ぜ込んだパネトーネ生地のパン。綺麗に切られた断面は、卵を多く使っているため濃い黄色を見せていた。

「うーん、私の好きなものばかりだとウインすねるしなあー。メインディッシュくらいは　仕方ない。譲歩してあげますか」

サリユーナは戸棚から白い皿を出しながら、おどけて舌を出す。

赤ワインで煮込んだ肉の香りに、ローリエ、セロリ等のハーブと香

味野菜の香りが重なる。

鍋の中には牛すね肉の赤ワイン煮込み。これだけはウインクルムの大好物である。仕込みに三日はかかるので、今日作るまでは秘密にしておいた。知らない人がたくさんいる食堂で食事を取るよりも、ウインクルムと二人の時間を過ごした方がサリユーナとしては安らぐ。

「早く帰ってこい、ウイン！」

銀色のレードルを持ち、鍋相手にすごんでみてもウインクルムが戻って来る訳がない。

準備期間として入寮した途端に、ウインクルムは図書館通いを始めた。二十四時間常に解放されている図書館。ウインクルムはついつい時間を忘れて、調べ物に没頭しているようだ。酷い時には外が真っ暗になっても戻ってこない。

(ウインは勉強好きだからなー)

勉強より体を動かす方が好きなサリユーナとしては、学業への準備を済ませた現在は特にする事も無し。

「でも、お腹すいた……。今日も遅いのかなー」

椅子に座り、テーブルに突っ伏しながらサリユーナは呟いた。

暇な時間を一人芝居でごまかすにも限度がある。

かといって、一人で食卓に着くのは嫌なもの。

窓から見えていた夕陽はほとんど沈んで、空は青紫色に暮れなずんでいく。

突然、ぴくつとサリユーナは反応して身を起こした。廊下から部屋へ向かって足音が聞こえてきたからだ。

「おかえり、ウイン！」

サリユーナはドアを開け、部屋の前で止まった足音を出迎えた。そうして彼女は固まる。

その人はサリユーナより頭二つ分は高い。褐色の肌、黒い髪も髭も伸びきり、埃と汗に塗れた姿をしていた。どう見てもウインクルムでは無い。

「え、あれ？　ここって男子寮の二〇七号室だよ……ね？」

戸惑いがちな低い声が、サリユーナの耳に届いた。

固まりながらサリユーナは“彼”を凝視する。

なぜなら目の前にいたのはウィンクルムではなく、まったく知らない男性だったからだ。

？

部屋の内と外。

サリユーナはドアノブに手をかけたまま、固まっていた。

“彼”も鍵を手にしたまま、サリユーナを見て固まっている。

全身が埃と泥で薄汚れ、黒い髪も髭も伸び放題。チョコレート色した皮のロングコートは丈夫そうだが、ところどころ日焼けやシミで変色している。裾からは、泥に塗れた作業着と安全靴が見えた。広い肩幅、均整良くついた筋肉、衣服から少し覗く首筋や手の甲の肌が赤銅色なのは日焼けのせいだけではあるまい。

(この人がウインのルームメイト?)

なぜドアの覗き穴から確認しなかったのだろうか、サリユーナは軽率さを悔いた。

村と違って知らない男の人も多いんだから気をつけるのよ？

中には悪意を持っている人もいるのだから

くどくど注意していた母アルマの言葉を、サリユーナは思いたす。今思えば聞こえてきたのは、ウインクルムの足音と違った。いつもなら聞き間違えないのに、いくら空腹でぼんやりしていたとはいえ弛んでる証拠だ。サリユーナは己の怠慢に軽く唇を噛む。

「えーと、ウインクルム・グルカさんのお客さん、かな？」

サリユーナが逡巡している間に、“彼”はドア横の壁をちらっと見て問いかけてきた。

廊下のドア横の壁には入室者の名札がかかっていた事をサリユーナは思いたす。目の前の男性はそれでウインクルムの名前を確認したのだろうか。

「あ、あの、ごめんなさい！　ここ、男子寮なのに、お留守の間に勝手にあがっちゃって……。あの、私、すぐに出て行きますからっ！」

慌てて外したエプロンを片手に、サリユーナは“彼”の横をすり

抜けようとした。制止しようとして出した右手を“彼”は引っ込める。

それは泥や埃に塗れた手が触れるのを“彼”が躊躇したように、サリユーナには見えた。

「待つて、部屋で一緒に食事する予定だったんだよね？ 荷物だけ置いたら俺は出て行くから。気にしなくていいから」

部屋から出て行くこうとするサリユーナを“彼”は懸命に止める。だがその声はちんぷうしや闖入者によって妨げられた。

「シャマイーム！ 頼んでいた物は手に入ったか？」

「イエクーム……」

“彼”は獅子が低く唸るような声を発し、険しい顔で右を向く。「どうかしたのか？」

イエクームと呼ばれた男性は気にした風もなく、サリユーナと“彼”の方へ向かってきているようだ。足音が部屋へ近づいてくる。

“彼”の制止で逃げそびれたサリユーナは、好奇心に負けてそっとならんで覗いてみた。

途端に、鋼色の長い髪を軽く結わえ、とびいろ鳶色の瞳をした柔和な美形の男性と目が合い、慌てて首を引っ込める。

「か、可愛いーっ！ 誰！？」

しかし、遅かったようだ。

「だが、シャマイーム。お前がちよっかいを出すにはさすがに若すぎないか？」

イエクームはサリユーナの姿を一瞥すると、走りより“彼”を咎めるように茶化す。

（ワインのルームメイトさんは、シャマイームさんっていうんだ…ああ、でもどうしよう？）

サリユーナは何とかしてこの場を逃げ出したかったが、大の男二人に出口を塞がれてはそれも叶わない。シャマイームはすぐに出て行くと言うが、どう考えても自分に気を使っている事は分かった。

本来の部屋の主を追いだして、自分が居座るのも図々しい。

「イエクーム、お前が何を妄想しているのかは考えたくも無いが、違う。ウインクルム・グルカさんのお客さんらしい」

シャマイームは横の壁にかかった名札を指差し、呆れた声でイエクームに告げた。

「安心したよ。とうとうお前がそこまで爛れた学生生活を送りだしたらどうしようかと　ぶっ」

「頼まれていた土壤のサンプルな？」

シャマイームはコートのポケットから取り出したシャーレで、イエクームの口を塞ぐ。中に入っているのは焦げ茶色の土だった。

「あ、あの、私、女子寮に戻ります。本当にごめんなさいっ！」

慌てて頭を下げ詫びながら、サリユーナは立ち去ろうとした。

「いや、折角食事作っただし。ウインクルム・グルカさんと食べなよ。俺が荷物置いたら出ていくから　」

シャマイームは慌てて、そんなサリユーナを止めようとする。

「　ウインクルム・グルカは僕ですけど、何かご用ですか？」

小さな騒動に、また参加者が増えてしまった。図書館から戻ってきたウインクルムの険しい声が、黄昏時の廊下に反響する。

「おかえり、ウイン！」

見知った兄の声に、少しほっとしたサリユーナは思わず叫んだ。

ウインクルムは足早に駆け寄ると、サリユーナとシャマイーム達の間割り込む。

「それとも僕の妹に何かご用ですか？」

まだ幼い琥珀色の瞳に剣呑な色を見せて、ウインクルムはその背に隠すようにサリユーナを庇う。

「あ、あのね、ウイン違うの　」

「いいからサリユーは黙ってて」

シャマイームもイエクームも、ウインクルムより背も高く逞しい。争えば負けるのは目に見えている。

それでもウインクルムは双子の妹を守ろうと、彼女の盾になるつもりだった。

「そりやいかつい男二人に、大切な妹さんが囲まれていたら誤解もするよね。驚かせてごめん。俺はイエクーム・シエレグ。上の階、三〇七号室の住人だよ。シャマイームに用があつてこの部屋に来たんだ。よろしくね」

十人女の子がいたら八人は見とれるであろう甘い頬笑みを浮かべ、イエクームはシャマイームを指さす。そしてそのまま右手をウインクルムに差し出した。

「初めまして、俺はシャマイーム・ルーアハ。君のルームメイトだ。これからよろしく、ウインクルム・グルカさん」

そう言つてシャマイームは、申し訳なさそうに髪の毛の伸びた頭を掻く。

「あ、あの、すみません。変な誤解しちゃったみたいで……。僕はウインクルム・グルカ。こっちは双子の妹のサリユーナです」

二人の自己紹介にウインクルムは緊張を解いた。そしてイエクームと握手を交わしつつ、ウインクルムは頬を赤く染めシャマイームに頭を下げる。

「お前が帰ってくるのを待つてやったんだ。飯食おうぜ、シャマイーム。ちょうどいいから歓迎会を兼ねてみんなで食べない？」

そう言つてイエクームは人懐っこい笑顔で、左手に持っていた藤^{とう}製のバスケット^{せい}を掲げて見せた。

？

夕飯はもう少し後になるだろうと、サリユーナは一度料理をテーブルから避けておく。

シャマイームがシャワーを浴びている間、イエクームとサリユーナ達はとりあえずお茶を飲む事にした。

食事前なので少し悩んだが、空腹に耐えかねたサリユーナはクッキーを少し皿に盛り、テーブルの中央に置いた。

「シャマイームの部屋から、椅子取って来る」

「あ、僕も」

もともとが二人用の部屋のため、テーブルに備え付けの椅子は二脚しかない。仕方ないのでシャマイームとウインクルムの自室から、もう一脚ずつ持ってきて人数分の椅子を確保。

少し縦長いテーブル　イエクームと向かい合わせになってサリユーナ達は席に着く。

「俺とシャマイームは炎鳳国^{えんおうこく}出身なんだ。君達、グルカつて事は水妖国？」

サリユーナとウインクルムの目元を縁取る黒揚羽の片翹を、イエクームは鳶色の瞳で興味深げに見つめる。

「グルカ族を知ってるんですか？」

ウインクルムの問いにイエクームは頬笑み、言葉を続けた。

「ああ、前に水妖国を旅した事があるんだ。入学前にちよつと見聞を広げようと、シャマイームと二人で。それにしても強いね。グルカ族の人って皆あんなに強いものなの？」

サリユーナ達は誇らしげに「うんうん」と頷く。やはり自分達の部族を褒められると嬉しい。

「ちよつど害獣が出没した時に居合わせちゃったんだけどさー。一匹とはいえ、瞬殺！ お見事としか言えなかつたよ」

ちよつどその時、脱衣所のドアが開き、シャマイームが髪を拭き

ながら出てくる。

「腹減った。早くしろよ、飯食おうぜ」

イエクームは話を中断し、シャマイームに持ってきたバスケットを渡す。

「ごめんね、先に食べててくれて良かったのに」

イエクームの抗議は無視して、シャマイームはサリユーナ達に謝罪する。

髭を剃り、とりあえず髪を整えたシャマイームを見てサリユーナ達は目を丸くした。彫像のように通った鼻梁びりょう、力強い眉、藍色がかつた黒い瞳は穏やかな中に意思の強さを秘めている。

「シャマイームさんって男前だったんだ……」

「ウイン！」

思わず本音を漏らすウインクルムを、サリユーナは少し睨んで窺たしなめる。シャマイームは黙って苦笑しつつ、イエクームの隣の席に着いた。

「まあ、仕方ないよね。さっきのこいつの姿ときたら、まるで汚泥おでいの中に突っ込まれた猛獣みたいな」

「お前は口を開くな、イエクーム」

片眉を吊り上げシャマイームが睨んでも、気にした風も無くイエクームは言葉を続けた。

「ところでお前は何で座ってんの？」

「は!?!」

より一層眉を吊り上げたかと思うと、シャマイームは嫌そうにバスケットの中身を確認する。

「……これは一体何だ? イエクーム」

シャマイームの右手にはじゃがいもが握られていた。どう見ても“生”なまのじゃがいもが、である。

「見て分らないのか? 仕方ないな。無知なお前にも分かるように、親切な俺が懇切丁寧に説明してやろう。それは通称“じゃがいも”ほれいしよと言っただな? またの名を“馬鈴薯”ほれいしよとも言う。ビタミンや

澱粉が多く含まれている上に」

「いや、誰もそんな事は聞いていない。なぜ“生”なのかを俺は聞いていないんだ」

イエクームの流れるような弁舌を遮り、シャマイームの怒気を孕んだ声はどんどん低くなっていく。

無理もない。遺跡調査からよれよれになって戻ってきたばかりで、シャマイームは疲れきっている。

そこに「飯食おう」と持ってこられたのが“生”のじゃがいもとなれば、苛立つ彼を責める事は出来まい。

「なぜ生なのかという点においてはいくつかの理由が考えられる。

まずその一、俺が皮を剥くのが面倒くさかった。その二、俺が過熱調理する手間が面倒くさかった。その三

「もう、いい」

諦めたように額を掌で押さえ、シャマイームは溜息混じりにイエクームのお喋りを中断させた。

「分かってくれて嬉しいよ、シャマイーム。とりあえず調理してくれない？」

二人のやり取りを肩を震わせ耐えていたサリユーナ達だったが、こらえきれずにとととう吹き出してしまった。

「あ、あの作りすぎてしまったから。お口に合うかどうか分かりませんが、私の料理で良かったら」

サリユーナはそう言って立ち上がり、料理を再びテーブルの上に並べ出す。

「あ、手伝うよ」

そしてシャマイームも慌てて立ち上がるが、サリユーナは「一人で大丈夫です」と彼を止めた。

「ほら、見る。お前のせいでサリユーナ嬢に気を使わせてしまったじゃないか」

「むしろ、お前が気を使えよ！」

しれっと言い放つイエクームに、シャマイームは少し声を荒げて

怒る。

本来ならウインクルムも手伝うところなのだが、さつきから笑いをこらえるのに必死で動けないでいた。

「仕方ないな、女性だけ働かせているのは流儀に反する。俺も働こう」

サリユーナが口を開きかけたが、イエクームはそれを制して椅子から離れた。

イエクームはバスケットの中に手を突っ込むと、果実酒と赤ワイン、パン、チーズ等を取り出す。

「残った十個のじゃがいも“だけ”はシャマイームにやる。間違っても生で齧ったりしないように」

「するか！」

「調理した後なら、このイエクーム・シエレグ食してやるのもやぶさかではない」

「頼むからお前はもうここに来るな、イエクーム」

二人が下らないやりとりをしている間に、サリユーナは白磁の大皿に牛肉の赤ワイン煮を盛りつけ終わっていた。

「後はやるから座ってて」

手伝おうとするサリユーナを席につかせ、イエクームはキッチンに立つ。

そうして彼は優雅な所作で手際よく飲み物や、残りの食べ物を食卓に並べていった。

？

近くの街で祭があった日。

色とりどりの紙吹雪が舞い、その下を流れて行く笑いざめく人々の波。

往来の両脇には数々の露店が並び、道行く人の目を惹きつけた。

飴細工師は創造神もかくやという手並みで、熱した飴を小鳥や仔犬の姿へと変えていく。楽師は手風琴アコーディオンの蛇腹をうねらせては軽やかな旋律を奏で、露店に並ぶ糖蜜のかかった果実が放つ輝きは宝石のよう。

風船売りは木と皮でできた鞆ふくらを踏み、空気を送っては風船を膨らませていた。

小さな風船は大きく膨らむにつれ、真紅から薄紅へと色を変える。人の好きそうな彼は子供たちにせがまれ、旅の話に夢中。

余所見しながら踏み続ける鞆は、彼の持つ風船へ空気を送り続ける。限界を超えて膨れた風船は、目の前で大きな音を立てて破裂した。

どうして人は、ものすごくびっくりするほど全然関係の無い事を思い出してしまうんだろう？

サリユーナは目を見開いて石のように動けなくなっていた。

目の前で赤い風船が割れた時、耳が痛かった。今も少し耳が痛い気がする。

あの後、一体どうなったのか。

つややかな短い黒髪、鈍色の瞳、紅い唇を引き結んだ美女は怒り

に震えながらシャマイムを睨んでいた。

彼女の少しきつい香水の芳香が、夜気やきに混じり漂う。

ザビーネ・ユスト　サリユーナのルームメイト。そしてサリユーナが自室に居たくない最たる理由でもある。

皆で楽しい夕食を終えた頃には夜も更けていた。街灯の灯りと月の光が石畳を照らす。

夜道は危ないとシャマイムが、サリユーナを女子寮まで送ってきた。玄関先で別れを告げシャマイムが帰ろうとした途端、ザビーネが寮から出てきていきなり彼の頬を平手で打ったのだった。

「いったい、どういう事？」

「それはこっちが聞きたい、ザビーネ。何で急に殴られなければならないんだ？」

溜息交じりに低く唸り、シャマイムは頬を撫でた。

「戻って来ているのに私に真っ先に会いに来ない。その上、他の女を連れてくる恋人への罰としては可愛いものだわ」

三日月を横にしたような酷薄な笑みを真紅の唇に貼り付けて、ザビーネはシャマイムからサリユーナへと視線を移した。冷たい瞳の奥には暗い憎しみの炎が燃えている。

身に覚えの無い敵意にサリユーナは、出来る事ならシャマイムの背に隠れてしまいたくなくなった。だが、それはザビーネの怒りを余計に買うと、必死で耐える。

「やめるよ、怯えてるだろ。彼女は俺の新しいルームメイトの妹さんでサリユーナ・グルカさんだよ」

シャマイムはザビーネの視線から、サリユーナを庇うように体をずらした。

「ええ、知っているわ。入寮早々ほとんど男子寮に入り浸っている私のルームメイトよ」

ねめつけるように蛇蝎視だかつししながら毒を吐くザビーネの声は、サリユーナの耳から心まで浸透していく。温厚で快活なグルカ族しか知らないサリユーナにとって、それは酷く恐ろしいものに思えた。

「そういうのもやめろ。慣れない環境の変化で兄妹一緒に居たいのは自然な事だろ？ それに会いに来なかったのはイエクームに捕まっていたからで、彼女のせいじゃない」

「……いつ戻って来ていたの？」

怒気を孕み低くなっていくシャマイムの声に怯んだのか、ザビーネの声から力が失われていく。

代わりにどこか媚びるような甘さが滲んでいた。

「ついさっきだよ。それに会いに来ないって言うけど、どうせ用は無かったんだろ？」

「そうよね？ 用が無いなら会わなくていいのよね？」

少し軟化しかけていたザビーネの声音に苛立ちが混じる。

(どうしよう……?)

自分がいるせいかも知れないと思うのだが、サリユーナは傍観するのみで何も出来ない。

「何か話があるなら聞く。サリユーナさん、ごめんね。お休み」

ザビーネを促し、サリユーナに詫びながらシャマイムは踵を返す。

その後をザビーネは黙って追っていく。もちろん、ちらりとサリユーナに侮蔑の眼差しを向けるのを彼女は忘れなかった。

シャマイムはウィンクルムのルームメイトで。

ザビーネはサリユーナのルームメイトで。

その二人は恋人で。

「ザビーネさんとこれからも同室なんて、やっぱり嫌かも……」

折角楽しい夕食の時間を過ごしたというのにと、サリユーナは憂鬱ゆううつな気分で呟く。

ただでさえ苦手なタイプのザビーネ。その上またこの件で睨まれてしまった。

「とりあえずシャワー浴びよう」と

シャワールームのドアを開け、またサリユーナは憂鬱になる。

「うう、ザビーネさんって絶対だらしなないと思う」

数本とはいえ排水溝にザビーネの黒髪がいつも残っているのを見る度に、サリユーナはうんざりした。

自分のものでも嫌なのに、他人の抜け髪には余計に嫌悪感が募る。紙で包んで脱衣所のゴミ箱に捨てると、とりあえず流水でシャワールームの床を流した。

ザビーネは光皇国の出身、どうやら資産家の子女らしい。身の回りの世話等は今まで他人にしてもらってきたのか、少しこういう事には無頓着でもある。

これもまた、サリユーナがザビーネとあまり同じ部屋に居たくない理由でもあった。

(シャマイームさんはこういうところ知っているのかな?)

イエクームも好き放題言ってるようで、意外と気を使ってくれているのがサリユーナ達には分かった。そしてシャマイームも一見無愛想で無口だが、他人にはとても気を使うタイプに思えた。

他人に一切気を使わないザビーネと彼が恋人というのが、サリユーナには不思議で仕方が無い。

とりあえず汗を流し終えた後、洗い髪を拭きながらサリユーナは自室に戻り鍵をかける。

「早く寝よう。明日は学校を案内してもらおうだし」

サリユーナは枕に顔を埋め、憂鬱な気分を払うように呟く。

イエクームの提案で、明日はウィンクルムも図書館通いを休んで一緒に遊ぶ事になった。

まだ校内をあまり探索していなかったサリユーナにとって、楽しみな明日の予定。

(あ、でもシャマイームさんも一緒なんだっけ)

あんな場面を見た後で、どんな顔をして会うべきなのか悩む。

こうしてシャマイームが戻ってきた日は、サリユーナにとって災厄の日となったのである。

？

薄いカーテンの布越しに柔らかい朝の光が差し込み、小鳥の鳴き声が聞こえる頃には、サリユーナは身支度を済ませていた。

昨夜の出来事を思うと、楽しい気分と憂鬱な気分半々といったところ。

サリユーナは少しでも嫌な気分を拭い去ろうと、鮮やかなレモンイエローの膝上ワンピースを選ぶ。

そしてインディゴブルーのジーパン、髪も邪魔にならないようにバレッタで留める。歩きやすい靴をと言われていたのを思い出して、白いスニーカーにした。

約束の時間は九時。今は八時四十五分。女子寮の前まで迎えに来てくれる約束だったので、サリユーナは少し余裕を持って階下に降りる。

「おはよう、サリユ」

十分以上前だというのに、ウインクルム達はもう寮の門前で待っていた。ウインクルムは緑を基調にしたチェックのシャツ、イエクームは紺色のシャツ、共にジーパンという軽装だ。少し眠そうなシヤマイームが、黒いパーカーに迷彩柄のカーゴパンツという、これまた軽装で伸びをしている。

「おはようございます。お待たせして、すみません」

サリユーナはとりあえず皆に挨拶と待たせた事を詫げる。

「大丈夫。そんなに待っていないよ、今来たところだから」

「おはよう。こいつが早く起きすぎたんだ、気にしないでいいよ」とシヤマイームがイエクームを指差した。

「女性を待つのはいいが、女性を待たせるなというのがシエレグ家の家訓なんだ。お前も見習え」

「その家訓には“男も待たせない”というのも、是非付け加えて欲しいものだな」とシヤマイームは片眉を吊り上げて、涼しい顔のイ

エクリームを睨みつける。

「それにしても、サリユーナ嬢は本当に可愛いなあ。まるで妖精のようだ」

シャマイームを完全に無視して、イエクリームは相変わらず流れるような饒舌で言葉を続ける。過度な比喻で褒められて、サリユーナは耳まで真っ赤になった。

「危ない人だと思われるからそのくらいにしておけ、イエクリーム」とシャマイームはイエクリームの首根っこを掴んで、引きずっていく。「違うと説明してくれ、友よ」

「分かった」

サリユーナ達に説明するため、シャマイームは神妙な顔をして立ち止り振り向く。もちろんイエクリームのシャツの襟首は掴んだままだ。

「このお兄さんは本気で危ない人だから、あまり近づかないように」「はい！」と声を揃えて、サリユーナ達は頷いた。

「全然フォローになっていないぞ、シャマイーム。君達も元気良く返事しない」

「俺は嘘がつけない性質なんだ」

涼しい顔をするシャマイームに、イエクリームは渋い表情を見せる。それを見て、シャマイームは大口を開けて快活に笑った。褐色の肌に白い歯が目立つ。彼の少し発達した犬歯が、サリユーナの目に留まる。それはどこか牙のようにも思えた。

サリユーナ達を促しながら、シャマイーム達は数歩先を歩きだす。その間中、シャマイームが以前一時間以上イエクリームに待ちぼうけを喰らった事を、面白可笑しく語るのを聞いて、サリユーナとウィンクルムはつい笑ってしまった。

(シャマイームさんに、昨日のお礼とお詫び言いそびれちゃったな)

シャマイームに昨夜寮まで送ってもらった礼とお詫びを、サリユーナは言いたかった。だがザビーネとの事に触れてしまうとと思うと、皆の前でそういう話をするのも憚られる。なんとなくタイミングを

逃したまま、前を歩く二人を追うように歩き続けた。

「ウィンとゆつくり遊べるの久しぶりね」

少し先を歩くシャマイーム達を追いかけながら、サリユーナはウインクルムに話しかけた。

「ごめんね、ずっとサリユを一人にして」

「うん、勉強は大事だし。でも熱心なのはいいけど、体壊さないようにしてね」

すまなそうに謝るウインクルムを制して、サリユーナは微笑みかける。

「今日は勉強さぼって息抜きしようっと。だからサリユ、いっぱい遊ぼうね」

「うん、私達まだ学校を探検してなかったしね」

「うん」

サリユーナ達はお互いに顔を見合わせ、手を繋ぐ。

「サリユーナ嬢も朝食はまだだよ？　まず何か食べに行こうか」

後ろ向きに歩きながら提案するイエクームに頷き、サリユーナ達は少し足を速めた。

寮は校内の北東側にあった。そこから二十分足らず西へ歩いたところに、飲食店や雑貨屋等が並ぶ市がある。辺りは朝食を取る学生達で賑わっていた。混雑する場所では迷惑かなと、サリユーナ達は手を繋ぐのをやめる。

「ここがバザールのメインストリート。通称“蚤のみの市”だよ」

「わあ、色んなお店があるね」

イエクームの説明を聞きながら、サリユーナ達は興味深く辺りを見回す。中規模な街の商店街くらいの幅はゆうにある大通り。色とりどりの果実や、カフェのオープンテラス、衣服を吊ったラック等の、店に入りきらなかった品物が往来まで溢れかえっている。

今までは寮の隣の雑貨屋しか覗いていなかったため、大規模なバ

ザールは二人には物珍しかった。

「寮の側の店より、こっちの方が品数多いし安いよ。顔見知りになるとね」とイエクームは片目を瞑ってみせる。

サリユーナ達が不思議そうな顔をしていると、シャマイームが「こっちは学生が商売してるんだよ」と笑った。

「あれ、何かな？ 僕、見た事無い」

一軒先の店には多量の植物が小さな森を作っていた。その内の一株に興味を惹かれたらしいウィンクルムに説明しながら、イエクームも共に向かう。

「昨日はごめん。嫌な思いをさせてしまったね。本当は会った途端に謝らないと思っていたんだけど、ついイエクームのペースになっちゃった」

二人が少し離れると、シャマイームはそつとサリユーナに謝罪した。行き交う人々を避けるために少し体をずらして、サリユーナを庇う。

「いえ、私の方こそ送ってもらったせいで。あんな事になっちゃって、ごめんなさい」

「いや、謝らないで。俺の方が悪いから」

「いえ、そんな」

申し訳なさそうに頭を下げるシャマイームに恐縮して、サリユーナは慌てて首を振った。

「あの、大丈夫、でしたか？」

「彼女とはいつももの事なんだ。だから、そんなに気にしないで」

おずおずと聞くサリユーナに、苦笑いしながら答えるシャマイームの横顔が、それ以上この話をしたくないと語っている。

（やっぱり、シャマイームさんとは気まずいかも。ワイン、早く戻って来てよ）

だがウィンクルムはイエクームと話すのに夢中で、サリユーナの視線には気づかない。

「またイエクームの奴、長々と高説を垂れ流してるんじゃないだ

ろうな。俺達も行く」

サリユーナの居心地の悪さを察したのか、シャマイームはウィンクルム達の方へ歩き出す。

蒼銀の髪、琥珀色の瞳、何より右目を縁取る黒揚羽の刺青が物珍しいのだろう。周りの学生達が自分をじろじろと見ているのに、サリユーナは気づいた。

(う、嫌だな)。そんなに私って珍しいのかな。でもさっきまではこんなに見られてるって思わなかったのに)

そこでサリユーナははっと気づいた。道を作るかのように、シャマイームは人混みをかき分け前に行く。

(もしかして、さっきも……)

長身のシャマイームが今まで庇ってくれていたのではと、サリユーナは少し前を歩く彼の後姿を見つめる。気のせいかな、今も少し広い背中、なるべく隠すように進んでくれているように思えた。

「混んできたね」

振り向きサリユーナが付いて来ているのを確認すると、シャマイームは穏やかに笑う。

(シャマイームさん、気まずいなんて思っちゃってごめんなさい) そんな彼に頷き、サリユーナは心の中で少し謝る。

何かと場を和ませようとするイエクームもだが、シャマイームも根は良い人なのだと、サリユーナは思い始めていた。

？

朝食にと購入した露店のサンドウィッチを、四人は歩きながら食べ終わる。

肉や、卵、レタス、トマト等の素材の全てが新鮮。四方を海に囲まれた島にある学校で、どうしてこんなに新鮮な食材が手に入るのかと、サリユーナとウィンクルムは不思議に思った。

「ああ、それはこの島で学生が作っているからだよ。俺も少し関わっているんだ。ちなみに俺の専門は地質学と植物学ね」とイエクームが語りだした。

“ 絶海の孤島 ” と呼ばれるこの島は南北に細長い。

広大な領地を持つ地沃国ちよくこくと海を挟んで ちようど翼を広げた親竜の口から、子竜が餌をもらうような形で 島は存在している。

そして一週間に一度だけ定期便の船が行き来していた。

「子竜の頭部、つまり船着き場付近から学校の門をくぐるまでの間に大草原があつたでしょ？ あれ牧草地。車道から少し奥に行くと農園があるんだよ」

入寮する時にサリユーナ達が島に着いたのは夕方の便であつたため、家畜達は畜舎に戻されていた。黄昏時に家畜のいない草原を走るバス。だから単なる草原としてしか、彼らは認識していなかったのだ。

「で、ちようど子竜の腹部が学生達が主に使う校舎や寮、そしてこのバザール。最南端の足だか、丸まった尻尾だか分からない不格好な部分が、校内の全システムを扱う中枢機構」

琥珀色の大きな瞳をきらきら輝かせ、イエクームの話に双子達は耳を傾けた。

「その内、時間がある時にでも行こうか」

シャマイームの提案に、双子は思い切り首を縦に振る。

「ま、今日はバザールくらいかな。ちよっと知り合いのところに行

こつ。女の子だし、サリユーナ嬢も良かったら仲良くしてやって
そう言っってイエクームは裏通りへと、路地を曲がる。

少し歩くと人通りもまばらになっていき、旧校舎の前に四人は着
いた。

「ここね、元は校舎だったんだけど、今は学生達が自分で作ったも
のを売る集合商店みたいになってる」

コの字型になった建物の一階は吹き抜けで、廊下の奥に教室だっ
たらしき部屋が等間隔に並んでいた。

「メインストリートは業者からの品物も置いてるけど、こっちは
学生だけ。色んな試作品とかが安く手に入るんで、卒業生もたまに
買いに来るよ」

装備品や武器、薬品等の並ぶ部屋をいくつか横目に通り過ぎると、
花や香料の芳香が漂い始めた。

「ここだよ」

その店舗の前には『雑貨屋リーハ』と書かれた、白木の小さな看
板が置いてある。

「リーハ、いるか？」

シャマイームが店を覗き、声をかける。

「シャム兄にい！ イエク兄もどうしたの？ また冷やかし？」

鈴を転がすような愛らしい声の後に、小柄な女性が出てくる。肩
より少し長い黒髪、切れ長のアイズブルーの瞳、少し日焼けした肌、
健康的な肢体の持ち主だった。亜人種なのか黒猫のような耳と長い
尻尾が付いている。耳には銀の小さな花のピアス。藍色の短いスカ
ートに、オレンジ色した短い丈のパーカー、黒いショートブーツと
いった出で立ちだ。

「紹介するよ、こいつはリーハ・ヤム。俺達の妹分みたいなものか
な。リーハ、こちら俺と同室のウィンクルムさんと、その妹さんで
サリユーナさん」

シャマイームにサリユーナ達を紹介され、リーハはびよこんと頭

と尻尾を下げた。

「初めまして。私はリーハ・ヤム、十六歳です。よろしくね」

「あ、僕はウインクルム・グルカ。十四歳です」

「私はサリユーナ・グルカ、十四歳です。よろしくお願いします」
人懐っこく手を出してきたリーハに、双子はそれぞれ挨拶と握手を交わす。

「イエク兄もシャム兄も久しぶりだよね！ 元気だった？」とリーハはイエクームとシャマイームに、じゃれながら抱きつく。

「そういやリーハの顔を見るのも久しぶりだろ、シャマイーム」

「俺は遺跡調査に行くって言っておいただろ？」

シャマイームは目を細め、抱きついていたらリーハの頭を耳ごとくしゃくしゃと撫でた。

「俺達、三人とも炎鳳国の孤児院出身なの。リーハとは兄妹みたい
に育ったから妹分って訳」

三人の仲の良いやり取りを眺めていた双子に、イエクームが説明する。

孤児という事は親がないという事　グルカ村でも戦い等で命を落とした者の子供を、皆が助け合って育てていた。

人にはそれぞれ事情があり、それを深く追求するものではない。

よく父母がそう言っていたのを思い出し、双子はただ静かに頷くだけに留める。

「サリユーナちゃんとウインクルム君は良く似てるし、お揃いの刺青だけど双子？」

シャマイームにじゃれながら問いかけてくるリーハに、サリユーナは頷いた。

「グルカ族の何人かには出るんです、これ。刺青じゃなくなつて聖痕みたいなものなだけだ」とウインクルムは左目を縁取る黒蝶の片翹を指す。

「二人ともいいね」。私の事を変な目で見ないし。これからも仲良くしてね！」

リーハの言葉の意味が分からず、サリユーナとウインクルムは首を傾げきよとんとする。

「この耳と尻尾。私は獣人系の血筋なの」
ライカンスローフ

温厚な国で育った双子達にはぴんと来ない話だったが、亜人種を偏見の対象にする国もある。姿形が違う事を厭う者も少なくは無い。「そういうタイプならお前を紹介したりしないよ、リーハ」

穏やかな声で告げるイエクームの目が笑っていないのを、サリユーナは少し怖いと思った。

「あ、そうそう。せっかく、女の子を連れてきてくれた事だし、サリユーナちゃん良かったらお店見て行ってよ」

「はい！」

さつきから興味深げにちらちらと商品を見ていたサリユーナは、リーハの申し出に声が弾む。

衣服、香料、アクセサリー類が多量に置いてあるリーハの店は、それでも雑然とはしていない。きちんと整頓整頓されているというよりも、見せるために陳列してあるといった風情だ。

「これ、かわいい」

サリユーナが目を留めたのは、枝に止まった小鳥が羽を広げ飛び立とうとしている白木の彫刻だった。嘴には薄紅色の花に見立てたブローチを啜えている。

「それは小鳥もブローチもシャム兄が作ったんだよ」とのリーハの言葉に、サリユーナは驚いてシャマイムを見る。

「お前って手先だけは器用だよな。人間は不器用だけど」

「うるさい」

にやにやと笑いながらイエクームが肩に乗せた手を、シャマイムは仏頂面で払いのけた。

「相変わらず二人とも仲良しさんだね」と茶化すリーハに、シャマイムはひきつった笑みを浮かべる。イエクームは飄々とした体で頷いた。

その間、ウインクルムは茶色い小瓶に入った精油を興味深そうに

眺め、サリユーナは壁に吊るされている服を見ていた。

「これ、手縫い？ 凄く丁寧に仕立ててある」

リーハの店は普段着が多いが、ちよつとしたドレス等も数点置いていた。サリユーナは藤色の丈の長いドレスを手に取り、その出来栄えに驚く。

「ん？ もしかしてサリユーナちゃんって裁縫得意？」

サリユーナの呟きにリーハの耳がぴくぴくと動き、ついでに鼻もひくひくしている。耳の動きに連動して銀製の花のピアスが揺れた。「得意っていうほどじゃないけど、一応母に教えてもらったので少しは……。今着てる服は自分で作りました」

サリユーナはリーハの質問に戸惑いがちに返事する。ほとんど服は自前で作れるのだが、得意と言いきって良いものか悩んだ。

「ちよつと、触らせてね」と言つて、リーハはサリユーナの着ているワンピースに触れて、縫い目等を丹念に確かめる。

「ねえねえ、サリユーナちゃん、もし良かったら売り物作ってみない？ なんならお店も手伝つてくれたら嬉しいなあ〜な〜んて」

「えー!? あ、あの、私でいいなら是非やりたいです！」

サリユーナの熱意溢れる返答に、リーハのアイスブルーの瞳がキラリと光る。

「お給料は歩合制、お店の手伝い といつか、暇な時に遊びに来てくれたらいいかな〜って。私も一人で店番つまんないしさ。そんなにたくさんは払えないけど、様子見て相談でどう？」

「はい！ リーハさん、これからよろしくお願ひします！」

リーハの提案に、サリユーナは大輪の花が咲き誇るような笑顔で答える。少し不安もあるが、新しい事を始めるという期待の方が大きかった。

「という訳で、シャム兄、イエク兄。サリユーナちゃんの就職お祝いにお昼奢おほつて？」

くるりと振り返り、リーハも輝くような笑顔でシャマイム達にじゃれつく。

「サリユーナ嬢の就職祝いに、なぜお前に奢らなくてはならないのかを二百文字以内で述べよ」

冷然と言い放つイエクームに、リーハはふくれっ面しながら尻尾で彼の顔を撫でた。

？

クローバー亭　メインストリートにある新鮮な魚介類を扱う落ち着いた雰囲気のレストラン　昼食時の店内は少し混みつつあったが、五人はわりとゆったり座れる窓際のテーブルに案内された。

イエクームとシャマイームが壁を背に、その向いにリーハ、サリユーナ、ウインクルムという並びで席に着く。

シャマイーム達の奢りおごと言う事で「クローバー亭！」と叫んだりー八に、特に好き嫌いの無い双子達も賛同したからである。もちろん、イエクームには散々「本当に自分達が食べたい物を言った方が良い」と確認されたのだが。

マホガニー調のテーブルの上には、清潔な真白いテーブルクロス。そしてその上には魚介類をメインとした各種料理と白磁の取り皿が並べられている。

店の屋号である四葉のクローバーが絵付されている食器類。くつきりした紅白縞模様の海老がぐるりとかけられた新緑色のアボガドソース入りカクテルグラス。脂の乗った3種類の白身魚、ムール貝等の魚介類を主体にした、サフランたっぷりりのブイヤベース。ハーブを混ぜた生地で揚げた烏賊いかのフリッター、バナナの葉に巻き蒸された魚……等々。

「あの、僕達、自分達の分はお支払いします」

所狭しと並べられた料理と、店の雰囲気から、ウインクルムは御馳走してもらおう訳にはと、遠慮気味に申し出た。サリユーナもその言葉に頷く。

「いいよ。どうせシャム兄や、イエク兄は稼いでるんだし、たかっちゃんえ」

右手をひらひらさせて笑っていたリーハは「お前は自分の分払えよ？」とのイエクームの冷たい発言に、むくれる。

「この間、俺だけ御馳走になってるし。気にしないでいいよ、お礼とお祝い。リー八は仕方無いからついでな？ それに実はここも学生が絡んでるから安いんだよ」とシャマイムはリー八達を見ながら苦笑する。

「わーい！ だからシャム兄って好きっ！ で、やっぱり魚介類には白ワインだよな？」とリー八は大喜びで給仕を呼び、アルコールを追加注文した。

イエクームはシャマイムに「お前が甘やかすから、こいつが付け上がるんだ」と苦虫を潰しながら、海老を摘んで口に放り込んだ。

料理を食べている間に、シャマイム達三人の両親が揃って冒険者だった事。そして、皆、遺跡調査の際に害獣に襲われたりして命を落とした事を双子達は聞いた。

ただ、彼らの出身国である炎鳳国の王は大変おおらかな性質、国民皆家族といった考えの持ち主で、孤児だからと言って特に不自由はしなかった事。周りの人達も特別扱いもしなければ、偏見も持たなかった事も聞いた。

他には学校の事 学生達は裕福な良家の子女も居れば、一般家庭、もちろん貧民層の者も居る。そういった格差の中で、自身自身の研究分野や趣味等を活かしてこうやって商売しているのだと聞いて、双子達は驚いた。

「学校は学生が商売する事を許しているんですか？」

ウインクルムが不思議そうに彼らに聞くと「むしろ学校推奨」とイエクームは肩をすくめた。

害獣相手に過酷な戦闘を強いられる事もある冒険者は、五体満足で一生を終える事は少ない。中には命を落とす者も多い。そんな中でどれだけ多くの知識や経験が役に立つかは分からない。

学べる事は全て学べ、吸収出来る事は全て吸収しろ。

学校自体がそういう校風なのだと、イエクームは双子達に説明した。

「ま、おいおい慣れるよ。ここは世界の縮図みたいな所だからね」
イエクームは飄々としながら、手を伸ばしかけていたリーハより早く、最後に残った海老を摘むとまた口に放り込んだ。リーハは恨めしそうに、まだ動いているイエクームの口元を指を咥えながら見つめている。シャマイームは溜息をついて、追加していいよとリーハにメニューを渡した。

「そういえばサリユーナ嬢は料理も上手だったけど、裁縫も得意なんだね」

リーハがメニューとにらめっこしている間、イエクームがサリユーナに特技について質問する。

「……あ、はい。どちらも、母から教わっただけですけど」

急に話題が自分に振られた事に戸惑いつつも、サリユーナは答える。スプーンとフォークを使い、丁度ブイヤベースを食べかけている時だった。

「じゃ、家事全般得意だったりして？」

得意かと聞かれると悩んだが、人並み程度にはとイエクームに返事を返した。

「それは良い“俺の”お嫁さんになれるね。という訳でサリユーナ嬢、結婚を前提にお付き合ひして頂けませんか？」

イエクームの唐突な発言に皆の手が一瞬止まった。

「この前、俺に何て言ったか覚えているか？ イエクーム。お前の方が俺より年上という事を忘れるな」

シャマイームだけが動じず、冷やかな視線でイエクームを射抜く。初めての出会いで、イエクームに「お前がちよっかいを出すにはさすがに若すぎないか？」と言われたのを根に持っているらしい。「一歳だけだろ。男が細かい事を気にするな、シャマイーム」

「今、サリユーナさんは十四歳、お前は十九歳。五つの歳の差は大きいだろうが」

飄然と言い放つイエクームに、シャマイームは永久凍土さながらの冷気を纏いながら、正論を唱えた。

「このイエクーム・シエレグ。美しき幼な妻を貰った男として、全世界のもてない男共の嫉妬と羨望を一身に引き受けようではないか」「お前が色々おかしなのは置いておくとして……とりあえず、ご本人の意志は尊重しろよ？」

シヤマイームはそう言つて眼差しだけで問いかけると、サリユーナは一生懸命に首を横に振つた。

「ま、長期戦で行くさ。後、二年は付き合いがあるしね、俺達」

サリユーナの力一杯の拒絶も、気にしてない風でイエクームは微笑みかけた。

「そういえば、皆は食事の後はどこへ行くの？」

場を変えようと質問するリー八に、イエクームは「しばらくバザール流して、あそこかな？」と意味深な言葉を吐く。

一体どこへ連れて行かれるんだろう？ と不安げに

双子達はイエクームを見つめていた。

?

『模擬戦闘訓練用システム Real Virtualize
i on 起動』
リアル
バーチャライゼ

機械で合成された無機質な女性の音声が、静謐な空間に響いた。

『個人認証開始……承認……素体を仮想空間にエンコードします』

戸惑いがちな双子を思いやる事も無く、システムは空間を歪ませ
ていく。

クリーム色した無機質なりノリウムの床が、剥き出しのコンクリ
ート壁が、大小様々な長方形の素子エレメントとなり剥がれ落ちていった。そ
して辺りの風景は広大な樹海へと変貌を遂げる。

鬱蒼うつそうと茂る樹木に絡まる蔦、腐葉土の積もった大地。湿った土特
有の香も、熱帯密林独独特のむせかえるような草いきれも、全てが忠
実に再現されていた。

「わわっ、何これ、どうなってるの？」

ウィンクルムは素っ頓狂な声をあげ、辺りをきよるきよる見回し
た。サリユーナはいつでも動けるように構えつつ、腰に下げた短剣
の柄に触れる。

『あはははは、簡単に言うと“異空間”を形成して、その中で戦う
システムなんだよ。中で怪我しても現実には影響しないの。いきな
り戦闘開始じゃないから、そんなに緊張しなくて大丈夫だよ〜？』

二対二の方がいいねとオペレーター役を買って出たリー八が、笑
いながら説明する。ウィンクルムは笑い転げるリー八に、ありがと
うございますと赤い顔で呟いた。

『エンコード完了……素体着床確認……神経デバイスとの連結を開
始します』

好奇心、緊張、不安 それらがありませんになった表情で、双子
達は辺りを見回す。

「とりあえず害獣は出ないパターンで、地沃国ちよくこくの樹海を選択してお

いたよ。一学期末のオリエンテーションで行くからね」

イエクームの発言に、双子は神妙に頷く。そういえば予定表に樹海探索と書き込まれていた事を、双子は思い出していた。

「確かに慣れておいた方がいいですよ。入寮して知り合えたのが皆さんで、僕達運が良かった」

ウインクルムの発言に同意して、サリユーナも頷く。

「運がいいか、どうかは……。これは訓練用のシステムだから実際には怪我したりしない。気楽に、と言っても痛みは感じるんだけどね。いきなり実践で行くより、少し慣れておいた方がいいかなと」

シヤマイームは苦笑しつつも、双子に優しく語りかけた。

『コーションCAUTION……連結中は目を閉じないで下さい……連結中は目を閉じないで下さい……』

緑色のレーザー光が個々の網膜パターンを読みとるために、四人の瞳を撫でる。普段なら気に留めない微小な埃が舞っているのを、サリユーナは眺めていた。

生徒全員の手首にはめられている個体識別用の腕輪と、網膜パターンで、個体の情報を読みとり、異空間へと転送する。

システム内で負った怪我は現実世界にまで影響しない。終了後は、全てが“無かった事”となる。だが負傷における痛み、それに伴う精神的苦痛も、システム内では現実のもの。

リアルReal バーチャライゼーションvirtualization それは、この冒険者養成学校が誇る画期的な戦闘訓練システムである。

肉体には損傷を与えず、現実と同じ戦闘を体験出来る 各国の学生達が共同研究し、科学力と魔法の技術の粋を集め作りあげたものであった。

「旧バージョンは精神だけを飛ばすものだったけど、それじゃ体が鍛えられないって実際に中で戦闘出来るシステムを作りだしたんだよ。ただ、俺達はそっち方面は門外漢なのであまり詳しくないんだ」
シヤマイームがそう言っつて肩をすくめるのを見ながら、彼の専門は何なのだろうとサリユーナは考えていた。

『連結完了……五感及び交感神経の正常接続を確認しました。訓練を開始して下さい』

正常にシステム接続終了したのを、相変わらず無機質な女性の音声^{こゝろ}が告げた。

虚構の樹海の中で、双子とシャマイム達は十歩程の距離を開け、対峙している。

「ちゃんと二人とも動きやすい靴で来たね。感心、感心。それじや俺とシャマイム、サリユーナ嬢とウインクルムさんの組み合わせでいいの？先輩組の意地にかけて、万が一負けたら何でも言う事を聞いてあげよう」

のほほんとした口調でイエクームが双子を眺め、笑う。

「よろしく願います！」

体を動かしたくつうずうずしていたサリユーナが嬉しそうにはしゃいでいるのを見て「あまり無茶しないでね……サリユ」とウインクルムは溜息をついた。

「現実には支障が無いけど、かなりリアルに痛みは感じる。無理だと思つたら、その時点ですぐに降参していいからね？」

対するシャマイムは少し心配気に双子を気遣い、念を押す。

「平気です。父との鍛錬で怪我には慣れてますし」

にこにこしながら答えるサリユーナに、イエクームは「勇ましいね」と短く口笛を吹いた。

イエクームは腰に長剣を、シャマイムはその背丈の三分の二程の長さもあるうかという刃^{はびら}広の大剣を背負っている。システムが個人情報^{こゝろ}を照らし合わせて、二人の武器を具現化させたものだ。

「あれ、そつちやそつちは武器は？まさか護身用の短剣だけ？」

帯剣を許されている校風なので、一応二人とも護身用の短剣は腰に下げている。

「私にはウインがいるから」とイエクームの問いに答えながら、サリユーナはウインクルムと掌を合わせた。

その途端、ウインクルムの輪郭がぼやけ、光の粒子へ変化し霧散していく。蒼銀に光り輝く霧はサリユーナの両手に集結し、二振りの刃を形成した。

彼女の腰の高さまである湾曲な刃のタルワール刀、鉞状のククリ刀。微量な木漏れ日の光を増幅したかのように、二振りの刃は淡く蒼い銀光を放つ。

そしてサリユーナの周りには、細い蒼銀の鎖が幾重にも取り巻き、蠢いていた。

「長短の二刀流……？」

シャマイームは片眉を上げ、呟く。左右の腕を別々に振るう二刀流は攻守共に優れた戦闘方法だが、その分扱いも難しい。

「自在に扱えるなら厄介か」

「まったく、この剣術馬鹿が。俺はそれより鎖が気になるかな」とイエクームは片方だけ口角を上げる。

「四人とも準備はいく？ 始めるよ？」

シャマイームとイエクームのしごきと聞いて逃げたリーハが、シテム外部から音声だけで干渉する。

「俺は問題無い。それと他人事みたいに言ってるが、お前も後で訓練だからな？ リーハ」と冷ややかに応ずるイエクームに、リーハは悲鳴を上げた。

十歩足らずの距離を空け四人は対峙する。

『じゃ、戦闘開始！』

リーハの澁刺とした声を合図に、四人は構える。

最初に動いたのはシャマイームだった。地を蹴り、一気にサリユーナに距離を詰めると、左手で大剣を抜く。

ウインクルムの変化した鎖がシャマイームを止めようと蠢く。だが、すぐに動きを変えた。高い金属音が連続して響き、鎖が何かを床に叩き落とす。

「針!？」

シャマイームが垂直に斬りつける。後方へ跳躍し避けたサリユーナの瞳は、床一面に散らばる十数本の黒針を視認していた。視界の端に値踏みするような表情で、右手を構えるイエクームの姿が見えた。

針は大人の指先から手首程の長さで、糸のように細い。鎖の合間を縫って足元を狙っていた針に、あのままでは動きを止められた可能性も高いと思うと、サリユーナは背筋が寒くなる気がした。

サリユーナに考える時間も与えず、シャマイームの追撃は続く。踏み込み、横薙ぎに大剣を振るわれ、サリユーナは辛くも右手のクリ刀で受け流す。斬り結んだ訳でも無いのに、腕が痺れた。

「くっ……」

体制を立て直す事も出来ず、シャマイームの一方的な攻撃を逃れるためにサリユーナは低く後方へと飛びずさる。が、その着地点にはシャマイームが追撃をかけていた。サリユーナは剣を交差し受けとめるが、勢いを殺す事が出来ず、より後方へ薙ぎ払われる。

ウインクルムの鎖も何とかしてサリユーナを援護しようとするが、イエクームの放つ黒針を防ぐのに精一杯でシャマイームの動きを封じる事が出来ないでいた。

そしてシステムが作りだした樹木の太い幹にサリユーナの右足が着くか、着かないかの内に、シャマイームが低身で疾走。そのまま大剣を足元から振り上げる。

シャマイームの頭上を飛び越えるようにして、サリユーナは刃を避けた。落下を利用してサリユーナは斬りつける。が、即座にシャマイームは剣を捻り、その刃を背面で受け流す。

サリユーナは着地しながら身を屈め、シャマイームの足元を薙ぎ払う。しかしシャマイームは右手だけついて後転、その体制から立ち上がりかけたサリユーナの顔面に向かって左足を蹴り上げた。軽く後ろに身を引き避けつつ、サリユーナはシャマイームの蹴りを追うように左手のタルワール刀で斬りあげる。

サリユーナの剣を交わすのに、シャマイムは反動と右腕の力だけで後転し、すぐに構えた。少しシャマイムから距離を置き、サリユーナも次の攻撃に備え構える。

そんな彼女を見て「強いね」と、シャマイムは笑った。

「シャマイムさんこそ」

少し息が上がっているのを気づかせないように、サリユーナも頬笑みながら呼吸を整える。

「今度はそちらからどうぞ？」

片方の口角だけ上げ笑うシャマイム。たぶんサリユーナが隠しているつもりでも呼吸が乱れているのを見て取っているのだ。そう感じて少し腹立たしくなる。実戦経験の差なのか、それとも実力差なのか。後者だとは思いたくなかった。

「レディ・ファーストって言葉知ってます？」

挑発と余裕。彼の言葉で逆に冷静になったサリユーナは、琥珀色の瞳でシャマイムを見据え、冴え冴えとした声で言い返した。

「ごめん、ごめん。今度から気をつけるね？」

シャマイムの声音の中に手加減が必要だったかな？と揶揄する響きをサリユーナは聞き取った。苛立ちよりも甘く見られている事に勝機を見出そうと、自分で自分に言い聞かせる。

「サリユーナ……？」

サリユーナの心境の変化に気づいて、ウインクルムが念で語りかけてくる。

“大丈夫よ、ウイン”と同じく念話で答えながら、サリユーナは右手を前に、左手を少し後方に構えた。同調^{シンクロ}し、武器化している護り手と遣い手は念で意志の疎通が出来る。

おかげで読まれたくない心の焦りまで、読みとられてしまうのは少し嬉しくない。

頭の芯は冷えていくのに、心は熱くなっていった。相反した理性と感情のおかげで、周りを見回し冷静な判断力を取り戻す事が出来る。

大剣使いで接近戦型のシャマイムと、針使いで遠距離攻撃型のイエクーム。二人は長く組んでいるのか、ぴったりと息が合っている。この統率された連携を崩すのはかなり困難だろう。

“ウインはイエクームさんの手や指の動きに集中して”

先程から針を投げる前にイエクームの指先の微かに動いている。それを先読みすれば、少しはウインクルムもイエクームの隙が突けるかも知れない。

“私はシャマイムさんに専念するから”と心の中で語りかけるサリユーナに“サリユ、あんまり熱くならないでね？ これって模擬戦だよ？”とウインクルムは念を押す。

「休憩、いや、ウインクルムさんとの話し合いは済んだ？」

どこまでこちらの能力や状況を読んでいるのか　シャマイムの問いかけにサリユーナは頷き微笑む。

「じゃ、お言葉に甘えて……こちらからいきますね？」

慣れない環境で人見知りしていたが、元々は気の強いサリユーナである。戦闘民族である誇り、そして戦闘能力の低い護り手ウインクルムを守る遣い手としての誇りもある。

「シャマイム、女の子なんだし手加減しろよ？」

そして鎖の間合いから離れているイエクームの台詞が、より一層彼女の闘争本能に火を点ける結果となる。

「お気遣いありがとうございます。でもそれじゃ訓練にな・り・ませ・ん・か・ら！ 手加減無用でお願い致します、先輩方」

その笑い方、怖いよ……と念話で呟くウインクルムを無視して、サリユーナは大輪の花開く頬笑みをシャマイム達に向ける。普段は百合のように清楚な印象のサリユーナだが、こういった時には同等の清らかさでも、どこか睡蓮の花の艶やかさを連想させる。

「では、こちらもお言葉に甘えて　手加減無しでやらせてもらおうよ？」

いいんだね？　とシャマイムの藍色がかった漆黒の瞳が問いかける。

少し捲れた唇から発達した白い犬歯が覗くのを、やっぱり牙み
いとサリユーナは思った。

？

一方、イエクームと攻防戦を繰り返すウィンクルムは焦っていた。

魔法すら防ぐ事が可能な鉄壁の守りを持ってしても、四方八方から繰り出されるイエクームの投げ針を防ぐのは困難であった。イエクームは死角や防御の隙を上手くついてくる。こちらの動きを読まれているとしか思えない。

そこでウィンクルムは気付いた。

最初からイエクームは鎖状のウィンクルムを狙わず、サリユーナを狙っている事に。

硬化しているウィンクルムに、針は効かない。はなからイエクームはサリユーナしか標的としていないのだという事に。

“サリユ……”

この人達って本当に戦い慣れてるよと呟くと、サリユーナからは“とづくに分かっている”と苛立ち混じりの思念が返ってきた。

少し離れた場所にいるサリユーナとシャマイームの剣戟は、高い金属音を響かせながらも続いていた。絶え間なく聞こえてくるその音が、戦闘の激しさを物語っている。

女の子だから手加減してあげる。

これはサリユーナが最も嫌う言葉だと、ウィンクルムは知っている。

普段、女らしいと言われるのは、もちろん嫌いではないと思う。サリユーナは母アルマの手伝いも良くしてたし、料理や裁縫だって上手い。まあ、双子の身内鼻肩が多少は入っているのかも知れないが。

だが、例え訓練とは言え、戦いの場でこういった類の言葉を聞くとサリユーナは人が変わる。

戦闘特化した遣い手に比べ、武器化する護り手は身体能力が劣る。決して遣い手が護り手の力を奪って生まれてくる訳では無いが、サリユーナはどこかウインクルムに対して申し訳無い気持ちもあるのではないだろうか。必死に父との鍛錬に勤しむサリユーナを見る度、ウインクルムの胸は痛んだ。

そしてまたウインクルムも護り手であるからといって、肉体的に弱い自分を恥じていた。

七十人程のグルカ村　だが、その全てが彼らのような能力者では無い。せいぜい半数の十五組三十人である。

その中でも女性の遣い手は希少とまでいかないが、数少ない。瞬発力、反射神経等は決して男性の遣い手に劣らないが、やはり筋力や、持久力に関してはやや劣る事を認めなかった。

男女で能力が入れ替わっていたらと、思った事もある。

もし自分が遣い手の能力を持っていたら　その方が良かった。サリユーナの盾となり、守り、彼女の能力を引き出す立場であったなら　。

今はまだ幼い双子は、同年代の者達にならそうそうひけを取らない。しかしこれから年齢を経た時には、その男女差は顕著に現れるだろう。

だが、ウインクルムは護り手である。どう願ってもそう生まれついたものは変えられない。

今の自分の能力を厭うくらいなら、向き合った方が良い。短所は長所に変えられるはずと、いつも双子はお互いに思っていた。いや、自分達に言い聞かせていた。

だから僕はイエクームさんの攻撃だけでも防がなくては。グルカ族は普段温厚だが、やはり戦闘民族。

その刃には正義と誇りを乗せて。

いくら実戦経験豊富そうな先輩達とは言え、あそこまでコケにされたサリユーナに、ムキにならないようになって無理な話と、ウイ

ンクルムは心中でそつと溜息を洩らした。

鬱蒼と茂る樹海の木々に邪魔され、光はほとんど地に届かない。薄暗い樹海の中で、イエクームの黒針は視認しにくかった。相変わらず鎖に捕まらないよう間合いを開けて、イエクームは黒針を投げてきていた。投げる瞬間、少しだけ指先が動く。サリーーナが言った通り、ウインクルムはそれを目安に、イエクームの攻撃を避け続けていた。

「しっかし、これじゃキリが無いね」

相変わらずのほほんとしたイエクームの口調が、ウインクルムには逆に薄ら寒く聞こえた。

本当にそう思いながら手をこまねいているのか、それとも……何か奥の手を隠しているのか。

「面倒臭いから、あつちが決着つくまで俺は逃げようかな」

そう呟くと手を伸ばし、頭上にある木の幹にイエクームは飛びついた。そのまま懸垂の要領で自らの体を持ち上げる。しかも左腕のみで。

接近向きではなく飛び道具を使う戦闘型だと思っていいたら甘かったかと、ウインクルムは歯噛みする。

「じゃ、そういう事で」

幹の上に立ち、ひらひらと手を振るイエクームを、鎖化したウインクルムは追った。ここで彼を逃して、サリーーナを上から狙われる事だけは避けなくてはならない。

「え、そんなに伸びるものなの!? それ」

鎖化したウインクルムが伸縮自在な事までは、知らなかったようだ。イエクームは小さく舌打ちすると、樹木の上部へと跳躍混じりに駆けあがって行く。

“逃がさない……っ!”

強く念じながら、ウインクルムはイエクームを捕獲しようと、鎖化した自らを伸ばし続ける。

「参加せずに済んで良かった。レベルが違いすぎるよー……」
モニターで戦いの様子を眺めていたリーハの眩きが思わず漏れる。リーハの目には、蒼銀の無数の細い蛇が、獲物に襲いかからんとする様に見えたことだろう。

大人の背丈四人分ほどの高さを登りきった頃、イエクームはかなり細くなった枝二本に片足ずつ立った。枝では体重を支えきれないと判断したのか、彼は右腕で樹の幹を掴んでいる。

そして追ってくるウインクルムを見下ろしつつ、腰の剣を初めて抜いた。

“もう少し”

イエクームの足元にその触手を絡めようと、ウインクルムはより一層速度を上げた。

「あんまり余裕無いかなく。とっとと済ませるか」

イエクームは左腕で剣を振るうと、周りの木の枝を切り落とした。そしてすぐに剣を鞘へ戻す。

樹海の一部が切り開かれて、陽光が降り注いだ。落ちてくる細かい枝葉を弾きながら、鎖はイエクームの足首を掴もうと、その触手を伸ばす。

と、その瞬間、イエクームは鎖を避け、下に向かって逆さに飛びこんだ。勢いづいて昇っていたウインクルムはすぐに踵を返し、イエクームを追った。イエクームは空中で懐に手を入れ、蒼銀の針を十数本程取り出す。そして、地に向かって針をまばらに投げているのが、ウインクルムには見えた。

“サリユっ！”

だが、サリユーナ達はもっと離れたところで戦っている。イエクームの思惑は分からなかったが、サリユーナに危害は無いと分かり、ウインクルムは安堵した。

その間にイエクームは途中にあった木の幹に右腕で掴みぶら下がると、落下の勢いを殺して針が作った図形を中心に着地する。針は、ウインクルムの鎖が作る影の上に歪な三角　いや、それはどこか

蝶が翅を広げて飛び立とうとする姿　　を描く蒼銀の星座のように散りばめられていた。

「さてと、呪術詠唱完了」

一本の少し長い蒼銀の針を取り出して、目の前に迫っていたウインクルムに見せながら地に落とす。針が柔らかい腐葉土になんなく刺さると同時に、ウインクルムは自らの動きが封じられた事を思い知った。

“ なっ!?”

「影縫いだよ。いやらしい呪術系だから、あんまり使いたくなくなっただけだね。それに君に効くかどうか分かんなかったし」

良く見ると蒼銀の針には、魔力を増幅する為の文様が刻まれている。

ウインクルムは己の迂闊さ、注意不足が腹立たしかった。

サリユーナやウインクルムの持っている護身用の武器も蒼銀製だ。蒼銀はそれほど珍しくないが、魔力を高めるには優れた金属である。

イエクームが見えにくい黒針から光を反射し輝く蒼銀製の針に変えた理由は、何らかの魔法を使うためとしか考えられなかったのだ。

花に止まった蝶が飛び立とうか、どうしようか、迷って翅を震わせるように　動きを封じられたウインクルムの鎖は小さく振動して、鈴に似た音色を奏でる。

「でもね、折角だから蝶にしておいたよ？　我ながら美的センスあるね」

かなり自画自賛で得意気に微笑むイエクームを、ウインクルムは啞然として眺めるしか無かった。

樹の上に登って枝を切り払ったのは、光を作るため。そして光によって影を作るため。

落下の間に、媒体とする針を配置し、詠唱を完了させた。それどころかわざわざ蝶の形にする余裕まで見せたのだ、この青年は。

「あれ、蝶は好きじゃなかった？」

少し乱れた髪を結わえなおしながら、今は武器化して声を出せないウインクルムにイエクームは問いかけた。

濃い灰色の髪は木漏れ日に反射して、銀粉が混ざって煌めいているかのよう。色素の薄い鳶色の瞳は悪戯っぽく輝き、かなり満足そうに頬笑んでいた。

？

疾走し、跳躍し、斬り結び、受け流す　闘う彼らの姿は闘気を纏ったおやかな舞姫と、颯風を従えるしなやかな獣。

いや、サリユーナの動きに連動してその裾をはためかせるワンピースが、春の風に舞う黄色い蝶のようでもあった。

横薙ぎに斬り込むシャマイームの一撃を、少し身をかわし避けるサリユーナ。

かわしきつた彼女を、シャマイームの反す刃が襲う。だが彼の刃は届かなかった。

わずかに身を右に擦ってその切っ先をかわし、振り向き様にサリユーナはタルワール刀で横薙ぐ。

シャマイームは剣で受け止め、そのまま力で押し返そうとする。

長く切り結んでは不利と判断。サリユーナはシャマイームの力に押されるまま、半歩下がった。そしてシャマイームの追撃を、後方に飛びずさって避ける。

胸元にちりりと肌を焼く一条の熱を、サリユーナは感じた。すぐにそれは薄く皮膚が裂かれた痛みに変わり、外気が素肌から熱を奪っていく。

刃は完全に避けたはず。

シャマイームが振るう剣の風圧で斬られたのかと、サリユーナはぞつとした。

もし直接シャマイームの攻撃を喰らえばダメージは甚大、動きを止められる事は必然。背筋に冷水を浴びせられたような悪寒に、サリユーナは一瞬身震いした。

が、怯んでいては負けてしまう。

サリユーナは唇を噛み、その大きな琥珀色の瞳でシャマイームを射抜くように見据えた。

先程まで、お互いに目を逸らさず闘っていた二人。

ところが今、シャマイームの視線は、どこかサリユーナを避けている風だった。

「あ、う……や、やっぱりやめよう。ちょっと休憩っ！」

向こうが有利なはずなのに、シャマイームが右手で制止を告げる。

「やめません！ 勝負を途中で投げ出さないで下さい！」

「いや、あのね、サリユーナさん、あの、君の服が……」

さっきまで手加減はいるのかと挑発してた癖にと、サリユーナは怒りが込み上げてきた。

「服が破けてる事くらい知ってます」

冷やかな眼差し、声色で 怒りすぎると、逆に凍てつくほど、精神が研ぎ澄まされていくのはなぜだろうと思いつつながら サリユーナはシャマイームの言葉を遮る。

さっきから切り裂かれた胸元に風を感じていた。でも下着は大丈夫なはず。

かなり見えているのだろうと思ったが、いちいち確かめると余計に羞恥が増す。だから、あえてサリユーナは確認しなかった。

“サリユっ！ 僕、イエクームさんに動きを封じられた！”

そんな時、ウィンクルムがイエクームに敗北したと、思念でサリユーナに話しかけてきた。

“ なっ……！！？”

シャマイーム一人ですら苦戦するのに、これにイエクームが加われば、正直サリユーナに勝ち目は無い。

「少し時間をあげるから というか頼むから、せめて隠してくれないかな？ 女の子にそんな格好させておくのも……」

相変わらず目を逸らしているシャマイームに「気にしないで下さい。私は一切、気にしませんから！」と言い捨てると、サリユーナは彼に斬りつけた。

「ちよっ、待ってってっ！ わっ」

一瞬、シャマイームの対応が遅れた。振るわれた刃を避けるため

に後方へ退き、シャマイームは木の根に足を取られかける。

「待ちません！」

シャマイームの態勢が整うのを待たず、サリユーナは力強く踏み込んだ。そのまま勢いをつけ、ククリ刀の柄を彼の顎に叩きこもうとする。

だが、シャマイームは後ろに身を仰け反らせ、かろうじてサリユーナの攻撃をかわした。しかしそこでシャマイームは再び態勢を崩す。大木を背にしたシャマイームを、サリユーナは刃で追い詰めた。「参った、降参」

小さく溜息をつきつつ敗北を認めるシャマイームの喉には、サリユーナのククリ刀が突きつけられている。

「女だからって害獣は遠慮してくれないんです。こんな程度では訓練にもなりません、先輩」

冷ややかに見つめる琥珀色の瞳から、シャマイームは目をそらせないでいた。喉元に当たる刃は彼女の瞳と同等に冷たい。

「サリユーナ嬢の勝ち。シャマイーム、お前の負け。ちなみに俺は勝ったからな？」

全く空気を読まないイエクームの間延びした声を合図に、サリユーナはシャマイームから身を離れた。もちろん、胸元は隠しながら。「訓練を終了します。五感及び交感神経と仮想素体との接続を解放します」

軽く上げたイエクームの右腕にシステムが反応し、周囲がその姿を歪ませていく。

ダイブした時とは逆に樹海が　木々の緑が、太い幹が、それらに絡まる蔦が　大小様々な長方形の素子エレメントとなり剥がれ落ちていった。

『模擬戦闘訓練用システム Real Virtualization シンを終了します。お疲れさまでした』

システム完全終了を合成された女性の声が告げる。

その頃には、クリーム色した無機質なリノリウムの床と剥き出し

のコンクリート壁に囲まれた空間に、四人は立っていた。

あ、とサリユーナが声をあげ、自身の胸元を見る。先程切り裂かれたはずのワンピースは、鉤裂きかぎさ一つ見当たらなかった。

「システム終了したら、何も無かった事になるって言ったでしょ？」
そんなサリユーナにイエクームは片目をつむって笑いかける。逆にシャマイームは視線を合わせず、ごめんとだけ小さく呟いた。

嫌がるリーハにイエクームが訓練しようと言いだしたが、時間もあまり無いしと五人は訓練ルームを後にした。

シャマイームとイエクームが先を歩き、その後をリーハと双子達が少し離れて付いて来る。

「どう思う？」

彼らとの距離を確認すると、シャマイームは声を響めイエクームに語りかけた。

「サリユーナ嬢は着痩せするタイプなんだな。あの年齢で、あの成長具合なら、何年後かかなり期待でき」

「俺はそういう冗談が嫌いだと常々言ってるだろうが。そうじゃない、戦い方の話だよ」

イエクームが下品に茶化すのを、シャマイームは胸倉掴んで小声で怒る。網膜に焼きついてしまった映像を思い出したのか、赤銅色の頬に少し朱が差していた。

「落ち着け、顔が赤いぞ。んー、お互いに気が合うようなら今後組む事を考慮に入れてもいいな。お前と二人でもそう不自由は無いが、遺跡に潜るのに戦力は多いに越した事は無い。特にあの能力は素晴らしいしな。それにサリユーナ嬢の『きゃっ』とか言わず戦闘放棄しなかった根性が、俺は気に入った。お前はどうなんだ、シャマイ

ーム？」

「同じく。太刀筋もいいし、戦闘センスも良さそうだ」

先程の戦いを思い出し、分析しているのだろうか。真面目な顔でシャマイームは頷く。

「どちらかと言えば、お前に幻滅した。模擬戦とはいえ、戦いの最中にあの程度で怯むな。お前が、そこまで純情とは知らなかった」

冷やかなイケームの物言いに、シャマイームは悪かったとしか返す言葉が無かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2838i/>

羽化する心 （仮）

2010年10月10日00時02分発行